

積丹ブルーとニシンの記憶

積丹半島は、切り立った断崖と奇岩怪石が連なる海岸美、有島武郎の小説『生まれ出づる悩み』の主人公、木田金次郎が愛した絵のような「積丹ブルー」と呼ばれる青色の海と白波、かつてのニシン漁千石場所の記憶、そしてさまざまな悲話伝説が織りなす北海道の歴史・自然史物語の宝庫である。

また、積丹半島は、1856（安政3）年発見の道内最古の炭鉱・茅沼炭鉱、1906（明治39）年の北海道初の岩内水力発電所、1989（平成元）年に運転が開始された北海道電力泊原子力発電所といった三つのエネルギー産業史上の「北海道初」を持つ場所でもある。

この半島は5万年前の溶岩台地であり、鉱物が豊富で、金銀重晶石（稲倉石鉱山）、亜鉛（余市鉱山）、マンガン（大江鉱山）の大鉱山があった。海岸は、この風化しやすい岩石が一年中強い北西の季節風波浪を受けて強く浸食され、切り立った海食崖の男性的な景観の断崖を形成し、浸食が免れた部分も波打ち際に奇岩怪石を生んだ。もともと溶岩台地で火道跡だった岩石はローソク岩、弊子岩などの名所岩となり、その美しさは洋上観光でも楽しめる。

海岸美の反面、半島の交通は難所が多く、明治期の漁業時代は北前船や磯船の巡航だけ、大正期には海岸線のみ道路開削で狭い危険なトンネル

漁業遺産「袋罾」

積丹半島東海岸の崖辺海中には、城壁のような珍しい石積みみの遺物が多数見られる。半島一周で114基もある。観光客には理解できない謎の構造物だが、これが積丹半島のニシン史で忘れられない漁業土木遺産である「袋罾（ふくろま）」の遺構である。ニシン場の網元が大金を投入し、本州からの護岸工事専門の石屋を呼んで造らせた。小さいもので磯船4、5隻のみの係留ものから、大きいものでは今の大型漁港に匹敵する縦横100m近いものまであった。

積丹半島では、3〜4月の漁期に季節風波浪が凄まじい上、崖海岸のため、沖で大漁したニシンを水揚げすることができなかった。このため、明治の網元は知恵を働かせて、ニシンを桙船（200石）から、20石程度ずつ直径3m、長さ15mくらいの小袋（袋網）に分け移して、天馬船でそれを岸に造った石積みみの堅牢な生け簀の袋罾（船溜り兼用）に水路で引き込み、ゆっくり水揚げした。この装置で積丹のニシン漁獲高は急上昇し、全道一の漁場に発展した。最盛期の明治後期には100m間隔で造られるほどで、「袋罾銀座」が現出したという。1933（昭和8）年に積丹のニシンは消え、バブルの見本のような